



自律・自治・自由の伝統は生きる

第9代学校長 市橋 勉

昭和47年3月21日付神戸新聞夕刊で「県立芦屋高校では部落解放同盟芦屋支部、父兄、市内の先生たちが、進学保障制度を受け入れる条件に問題があると抗議し、合格発表が2時間遅れる」との報道を読んだとき、予期もしなかった私はその4月に、校長として着任する。そして50年3月には、合格発表直後に中学校の先生方が私に面接を求め、「進学保障は入学者選抜制度を超える。」と主張し、合否判定の再考を迫るなど、在職三ヶ年間は、芦屋市同和教育運動の強い要請を受け、進学保障生徒を受け入れた県芦高の教育姿勢を問質される期間であった。

その間の討議経過や、教育諸活動については、「県芦高四十年史」の中に、「教育課程の移り変わり」「進学状況」から「自治会活動」まで全般にわたり、46年から10年間について簡明に記されている。

序文——発刊にあたり——に、馬場鉄夫校長は「人間にたとえると肉も皮もない骨だらけのような資料集になってしまった観があるが、じっくりと行間に眼をこらしてもらいたい。」「試練にたえて本校の伝統は残った、というよりもますます特異な校風は、みがきをかけたと思いたい。」と語っておられる。

県芦50年の歴史の中でも、その能取りの難しい、一つの時代の校長としては若輩すぎた私を、後藤・中村両教頭先生をはじめ、校務運営委員・同和教育主事・同委員および諸先生の学識豊かな識見と学校・生徒を思う教育愛によって支えられ、ときにはその主張・主義が異なっても互いに協力し、生徒の学習意欲の向上と基礎学力の充実を第一目標に掲げ、入念な教育実践を続けて、大きな成果を挙げられたものと感謝している。それらの教育活動が、保障生徒の孤立した中での学習でなく、級友の温かい友情に包まれての歩みであったことは有難く、生徒達も何よりも得難い体験であったと思う。

さらに、同窓会・育友会の役員、会員の方々から力強いご支援を得ましたことも感謝に耐えない。卒業生の方が、県芦で教えられた「自律・自治・自由、の精神を誇りとして話されるのを伺って強い感銘をうけた私は、49年春の卒業式訓話を三人の同窓生の信念に満ちた人生観を軸としてまとめる。

無名の人々の人生を執拗に追いつけたルポ「人間を生きている」（いんなあととりっぶ社）の著者児玉隆也氏（11回生）。49年3月、後輩のためにルポ・ライターの生きざまをご講演願ったのに、翌年5月に夭逝される。ガンに蝕まれておられながら、田中内閣を退陣に追い込む「淋しき越山会の女王」（文芸春秋）の執筆に執念を燃やし、畢生の名著「ガン病棟の九十九日」（新潮文庫）は亡くなられる1ヶ月前の脱稿である。文庫の解説の中に、芦高2年のとき芦高新聞に寄せられた、卒業を祝う文が載せられている。果敢なジャーナリストの生を偲びたい。

次に、18回生の高市嬉子さん。「友禅更紗など染め物のもつ美しさに魅せられて」小学校教師を退職し、手描き友禅染めの道に入られる。「花鳥風月の模様に限られ、着物やびょうぶにしか見られないのでなくて、人と心にテーマを求め、もっと自由な世界に伝統の美を解き放し得たら」と絵画風の染色に情熱を傾けられる若さは、さすががしい。

今お一人は、8回生小笠原平八郎氏。戦時中、相ついでご両親を亡くされる不幸のなか、19才で入学した県芦卒業の日に、少年の頃から暖めていた夢「親のない子に親に代わる愛を与える子供のホームを作ろう。」と決意される。ご夫婦で礎かれた家庭養護寮グイン・ホームの日々を、圭子夫人は子供のもつ生命力に感動されながら「若い里母の記録」（のじぎく文庫）にお書きになっている。氏にお会いしたとき、「全く無一文の私がこんな仕事の出来るのは、皆さんのお力です。」と多くの同窓生からの精神的、経済的支援を感謝されながら、物静かに語られる口調のなかに、困難な社会福祉の道一筋に生きる信念とバイタリティがあふれていて、これこそ、継承すべき県芦教育であると感動を覚えました。

現在、北区山田町の閑静な森林の中に造られた、虚弱児施設グイン・ホーム、精神薄弱者更生施設アリス・エリザベス・ホームで生活を共にされながら、神戸障害児療養教育研究所長、全国虚弱児施設協議会副会長など多忙のなか、その研究と実践の著作も重ねておられる。近著、知恵の遅れをもつ子どもの、診断・教育・親なきあとのために「誤りなき選択」（サイマル出版会）は、ご一読を願いたい。

私には教育の真諦を考えさせられた三年でした。